

シェイマス・ヒーニーの世界を読み解く

薬師川 虹 一

An Interpretation of the World within Mr. Seamus Heaney

Koichi YAKUSHIGAWA

Mr Seamus Heaney has once made a lecture at an International Wordsworth Conference, the title of which lecture was "Place and Displacement". Though the lecture was about some of the modern Irish poets, the title seems to be a helpful key phrase to open the door into the world within Mr Heaney himself.

Using the key words, I am trying to interpret Mr Heaney's poetical world. He has published nine books of his own poems. Herein picked up is the first two books, with the others left to be read in the following papers.

First, we have to know something about the Irish historical background and about Mr Heaney's own biological background.

Next I will pick up his first book of poems, called *Death of A Naturalist*. Herein disclosed is his longing to be one with Place, not with the superficial Place but with the genius loci. The Irish Potato, it may be right to say, is an objective correlative of the genius loci.

Thirdly, I will proceed to read his second book of poems called, *Door into the Dark*. We will find the image of the genius loci changes into water and eel. The change from potato to eel seems to be very significant. The one is a product of his families own making, while the other has nothing to do with them. To be one with other lives is far more difficult task but he has to do it in order to overcome the sense of Displacement and make close contact with the genius loci.

The water and eel changes itself gradually into the bog and reliques but the sense of displacement still keeps haunting with him. Mr Heaney's pilgrimage has to continue in order to regain Place, discarding Displacement.

(to be continued)

(1) 居場所の喪失

シェイマス・ヒーニー氏の作品を仲間達と訳していると、其処には何かしっくりしたものに寄り掛かりたいと願いながら、そんな都合の良いものなど見つかる筈もなく、さりとて、一人ではこの世のなか、なかなか安心して立っていられるものでもない。いつもイライラしながらどう仕様もない私達と同じ平凡な人間が、内心の苦しみを冗舌な論理と晦渋なイメージに託して、なんとか生き延びようとしている、そんな姿が浮かび上がってくるようだ。ヒーニー氏は95年度のノーベル文学賞受賞詩人、そんな偉い詩人を私風情と同じ次元で考えるのは不屈きであることは先刻承知のうえで、なぜか親しみの持てる彼の世界を私なりに読み解いてみようと思う。

ヒーニー氏は嘗て Wordsworth Conference で二度ばかり講演をしたことがある。ある時、その表題を“Place and Displacement”と付けられた。内容はアイルランドの現代詩人論であったが、この表題の言葉はそのままヒーニー氏の世界を読み解く時の鍵言葉として有効である。彼は実に“Place and Displacement”の詩人と言って良いだろう。

ヒーニー氏は北アイルランドのカトリック農民の子として産まれた。北アイルランドといえば私達にとっては文字の上だけにしか過ぎないが、それでも様々な複雑な問題を抱えたところだということは知っている。I. R. A. やシン・フェイン党の名前とか、カトリックとプロテスタントとの血の抗争とかだけは多分誰でも知っているだろうし、イギリス領土である北と、独立した共和国である南のアイルランドとに別れた一つの島国であることも知っている。熱心なサッカー・ファンなら南のアイルランドがサッカーの強国だということも知っているだろう。私達の理解は大体この辺が最大公約数的な知識ではなからうか。だがこれだけの知識さえ持っていれば、ヒーニーという人の立場のややこしさは多少とも感じ取れるのではないか。彼の世界を読み解くためには、彼と彼の先祖たちがぐり抜けてきたややこしい歴史を知らなければどう仕様もない。考えてみれば、今日、世界のここかしこで起っている紛争について僕たちは一体どれだけのことを知っているのだろうか、歴史を識る事は共通の認識を持つための第一歩だなどと偉そうなことを言うつもりはないが、戦後五十年にわたる疑似平和のなかで歴史の恐ろしさを忘れてしまったように見える僕たちも、他人様の歴史とは言え、ヒーニー氏の世界を覗こうとすれば、嫌でも彼らの歴史を多少なりとも識っておかなければならない。そうすれば僕たち自身のことを識るための手掛かりも少しは手に入るかもしれない。そこで掻い摘んでアイルランドの歴史を振り返ってみよう。

ゲーリック語を話していた彼らの先祖たちは、もはや殆ど居ないといっても良いだろう。勿論あの不思議な髭文字を書く人は今では皆無といって良い。勿論、髭文字の辞書は今も店頭で売られているが、それを使う人は特殊な人に限られている。道路の交通標識もローマ字に替え

られたゲール語の地名と英語の地名とが併記されているのはウェイルズの場合と同じである。併記されてはいても実際は英語の地名表記で全ては済まされているようである。小学校ではゲール語を教えているそうだが、マン島のマンクスの場合と大差はないようである。それほどイギリス化が北でも南でも進んでいるのだが、心の中の世界ではまだまだ先祖の血が脈々と流れている。たった一度の戦争で敗けたからといって、長い歴史をすっかり忘れた振りをしている国民とは訳が違うのである。歴史だけではない、童謡も民謡も忘れられ、コマーシャル・ソングとSF童話のキャラクター達、つまり、ロボットとポケ・モンがつぎつぎと現れて子供のエトスを形成する暇もないのが今日の僕たちの国情である。其処へ行くと、アイルランドでは今でも妖精たちが昔の名前で活躍している。野性の大鹿に注意、という鹿の絵を描いた道路標識と共に、悪戯妖精に注意、という意味でお馴染みの妖精の姿を描いた道路標識もあるのだから、アイルランドの人々の心の中には今も先祖の心が生きているのである。

紀元前三千年の頃に建造されたといわれるニュー・グレンジの古墳に描かれた美しい渦巻き文様に代表される曲線の組み合わせられたケルトの文様は近頃日本でも小さなブームを起こしている。アングロ・サクソンの文化には見られぬ、ケルトの文化の個性的な魅力は経済力や軍事力では遥かに及ばぬイギリスの文化を見事に圧倒しているようである。そういえば、ケルト文化に対応できるような文化がイギリスにあったかと真面目に問われればはたと困ってしまうのではないか。紅茶や茶器の文化はケルト文化に対抗できるとは思えないし、ウィリアム・モリスのデザインはケルトのデザインに比べれば昨日・今日の誕生である。イギリスの古い遺蹟はローマの遺蹟だ。イギリスの自前の文化は何処にある。

そのイギリスがアイルランドを征服し、植民地にしたのは十二世紀、1166年ヘンリー二世のアイルランド出兵に始まる。それ以後イギリスはアイルランドにおける権益を着実に拡大していったが、イギリスから出向いてアイルランドの領主になった者たちのなかにはケルト文化に吸収され、ケルトの民俗に同化するものも多くなってきた。そこでリチャード二世は1399年、自ら大軍を率いてアイルランド征服に乗り出した。だがその後のイギリスによるアイルランド支配は、イギリス国内の事情によってたびたび頓挫し、アイルランドの完全征服は成功しなかった。

やがてヘンリー八世のアン・ブリンとの結婚騒ぎが元となって、イギリスの宗教改革が起こり、ローマ・カトリックと断絶したイギリスはプロテスタントの教会を起こし、ローマ教会に対しイギリス教会を立てて、国王が教皇になり、宗教的独立を果たしたのである。イギリス国教会が誕生したのは1534年のことであった。勤勉儉約をモットーとするプロテスタント精神は1649年のピューリタン革命によって一挙に興隆し、近代資本主義精神の基礎を築いたことはよく識られているが、その指導者オリバー・クロムウェルがアイルランドを徹底的に侵略したことは案外識られていない。一説によればこの革命は財政の破綻していたイギリスがアイルラン

ドでの権益を回復するために仕組んだものだとさえ言われているほどだった。クロムウエル軍によるアイルランド侵略は猛烈を極め、その圧倒的な軍事力によって、アイルランドは壊滅的打撃を受けた。イギリスに近代市民社会の基礎を築いたといわれるクロムウエルの名声はアイルランドにおいては蛇蝎の如く忌み嫌われていたのである。こうしてイギリスによるアイルランド支配は着々と進められ、1800年の統合法によってアイルランドは完全にイギリスの支配下に入ることとなった。この「統合法」(Act of Union)を、文字どおり「結合の行為」と重ねた痛烈な風刺詩をヒーニーは書いている。

やがて第二次世界大戦後1949年にアイルランド共和国が独立し、北部のみが英国領として残ることになる。古来アイルランドはローマ・カトリックの布教が進みイギリスの宗教改革後もカトリックが主流を占めてきた。それに対し、イギリス国教会を押し立てるイギリスはカトリック教徒に対し数々の弾圧を加えてきた。勿論自由平等を求める近代市民社会にあっては、当然のことながら、カトリック解放を求める声も強く、幾度か「解放令」も出されたが、宗教的対立は根強く、最近に至るまでその差別は続いてきた。例えば、カトリック教徒は大学への進学も許されず、軍隊でも高官への道は閉ざされていた。特にその差別は北アイルランドでは厳しかった。

そんな北アイルランドのデリー州、カトリック系の農場モス・バンで1939年4月13日に生まれたのが我らが詩人シェイマスであった。政治的にはイングランドに併合され、大英帝国の一部とはなっているが、北アイルランドは長い歴史と文化を持つ土地としてヒーニー氏の身体の中に存在しつづけているのである。彼がその土地に執着するのは当然といえるだろう。とりわけ彼が生まれたところアナホリッシュ (Anahorish)——それは土地の言葉で「清水の湧くところ」を意味した——に限りない愛着を抱いているのはこれまた極めて当然といわねばならない。土地から湧き出る清水、それは土地の命であり、土地の霊 (genius loci) である。彼は常に土地 - Place - に繋がっている詩人であった。

アナホリッシュ

僕の〈清水の湧き出るところ〉

そこはこの世の最初の丘

小道の床に散らばる

黒ずんだ小石や輝く草を

洗うように泉が流れるところ

〈アナホリッシュ〉

子音の緩やかな傾斜

母音の牧場

と歌う土地こそ彼のやすらぎの場所 Place なのである。しかし運命は彼をこの土地から引きはなすことになる。

先祖代々の農民の家族であり、敬虔なカトリック信者であったヒーニー家は当然のことながら高等教育とは無縁な一家であった。ところが戦後、1947年イギリス教育特別法が成立し、貧しい人々にも、カトリック教徒にも、大学への進学が道が開かれることとなった。シェイマスはヒーニー家で始めて大学教育を受けることとなった。このことは好運であると同時に、一家のなかで彼のみが浮いてしまうという結果をもたらす事になった。先祖伝来の農民の血が彼でと切れる事になる。家族の中での違和感、居心地の悪さ、立場の喪失、そんな複合観念が彼のなかで芽生え始める。やがて、1972年の1月30日の血の日曜日がやってくる。デリー市は大混乱に陥る。それが原因という訳ではないだろうが、その年の8月シェイマス一家は北を捨てて南に移住し、ダブリン近郊に住むことになる。すでに詩人として名前の出てきていたシェイマスにとってそれは敵前逃亡にも等しい行為であった。北の人々との連帯を断ち切り、南にきたシェイマスはそこで民族の中での違和感、居心地の悪さ、立場の喪失感を覚えたことであろう。やがて詩人としての名声が上がるにつれ、イギリスのなかでも最もイギリス的なオックスフォード大学が彼を詩学教授として迎えることになる。典型的なイギリス紳士たちのなかで典型的なアイルランド農民である彼が、名声とは裏腹に厳しい違和感を覚えたであろうことは容易に推察できることである。土地への執着を歌った詩がある。

アンタイオス

地面に接して横たわっておればこそ
俺は朝のバラのように紅潮して立ち上がるのだ
戦いでリングに倒れるときも
不老長寿の妙薬の働きをする土のうえに

倒れようとするのだ
俺は大地の長い地平線からも
川の水脈からも乳離れすることはない
俺は木の根や岩を

梁にしたこの地底の洞窟のなかの
小さい丘のようなこの俺は

闇の胎内を揺り籠とし動脈の隅々まで
養われているのだ

やがてヘラクレスによって大地から引きはなされて滅びるアンタイオスにヒーニーは自らを擬しているのである。土地から引きはなされた詩人——ディスプレイメントの詩人——と私は彼を位置付ける。したがって以下に述べるヒーニー詩の解釈はこういった角度からなされるものである。勿論彼の詩は詩作の原理という角度からも、政治や社会との関わりという角度からも、或いは神話、伝説、宗教その他様々な角度からの解釈にも堪えるものであるが、今私は、全てを網羅した読み方よりも、一つの角度から読んでみることを選んだ事を理解してほしい。97年11月9日、多忙な日程の中からわざわざ京都を訪れてくださったヒーニー氏の歓迎会で私の考えを彼に話してみた。彼はそれで十分だと言ってくれたので安心して話を進めることにしよう。

(2) 『あるナチュラルリストの死』

彼の第一詩集『あるナチュラルリストの死』は1966年に出版された。この詩集の特色は用語の感覚的な豊かさと直裁さにあると言える。だがこの特色はこの第一詩集に限ったものではなく、ヒーニー詩の全てを通して流れている彼自身の性格によるものであろう。

前章で、私はヒーニー氏の基本的な特徴として、民族的、家族的場における立場の喪失感といえるものを指摘しておいた。だが少年時代のヒーニーは硬い家族の絆で結ばれたヒーニー家のなかで暖かく守られていたのである。その家族の繋がりや緊密さは後に結婚した妻のマリーも驚くほどだったという。「彼の家族はまるで殻の中でしっかりと守られた卵の様だった。そこには他人のはいる隙間もなかった。」とマリーの妹、ポリーは書いている。この一体感は当時、カトリックとプロテスタントに分かれて互いに憎しみ合い、隣人にも心を許せなかった、当時のアイルランドの社会状況を考えると自己防衛のための当然の姿勢であったのかもしれない。シェイマスはヒーニー家の一員として自分の居場所をはっきりと持っていた。同時に彼は家族の場所としてのモスバンと言う土地に強く結ばれていたのである。

ナチュラルリストと言う言葉は今日、アウトドア・スポーツ愛好家、自然愛好家、自然環境保護主義者といった、なんとなくプラス指向の言葉として受け取られるだろうが、ヒーニーが使う場合それはむしろマイナス指向の言葉となる。

一体、自然とは何なんだろう。自然に成立している生態系が守られている世界のことなのだろうか。確かにそれが自然であることを疑うことはできない。動植物の生態を観察し分類し、その生態系を乱さないように守ることは大切な仕事である。だが動植物の生態系に分類され、位

置付けられるものだけが自然を構成しているのだろうか。例えば、下北半島の恐山を訪れたときに感じるあの不思議な気分、恐怖感ともいえるものは何から発しているのだろうか。恐山を観察し分類すれば、それはあの辺りに漂う異様な雰囲気がいおう分を含んだ火山性のガスの所為だということは説明がつくだろうが、果たしてそれで納得するほど我々は単純な博物学者になり切ることができるだろうか。ハムレットの言葉を借りるまでもなく、この世には哲学で理解できないことがたくさんある、のではないか。僕たちが住んでいるこの京都の町は怨霊がひしめいているといわれる。それぞれの土地にはその土地の霊が潜んでいるだろう。地霊を博物学者はどのように分類するのだろうか。博物学的分類図に居場所を持たない地霊や怨霊は非科学的だといって切り捨ててよいのだろうか。土地との繋がりはいった博物学的分類に含まれない、疎外された霊類との繋がりもしっかり含むものであろう。「穴熊の穴の辺りには不思議な力の場が漂っている。それは霊たちの領界なのだ。僕たちは沼の縁に出没する超能力を持った男のことを聞いたことがあるし、人間に取りつくものや沼の精のことなどを噂しあったものだ。これらはナチュラルISTの分類には入らない存在なのだが、やはり本物なのである」とヒーニーは少年時代を回想して語っている。ナチュラルISTとは博物学的分類に入らないものの存在を否定する人のことと理解してもよからう。ヒーニーが生まれた土地との繋がりを大切に、自然に目を向けるのは表面的な自然を見るのではなく、その下にうごめくもの、物の奥にあるもの、それは地霊であったり、歴史であったり、神話であったりするのだが、そういったものとの繋がりを大切にするためなのである。『あるナチュラルISTの死』という詩集の表題は、自分の中にあるナチュラルIST的部分に死を宣告したものである。

このナチュラルISTは作品の中では表題作となっている「あるナチュラルISTの死」では小学校のウォールズ先生という姿で描かれる。

僕は春ごとにジェリーで包まれた粒粒を
 ジャムの空瓶に一杯詰めて家の窓敷居や
 学校の棚に並べ
 粒が膨らみ突然敏捷に泳ぐ
 オタマジャクシになるのを
 じっと待ち望んで見ていたものだ
 女のウォールズ先生はどうして
 父ちゃん蛙は牛蛙と呼ばれるのかとか
 この蛙が鳴くと母ちゃん蛙が
 何百という小さな卵を生むのかとか
 これが蛙の卵ですよとか
 教えてくれたものだった

ここにはナチュラルリストとしての僕や先生がいる。そこには幼い好奇心に満ちた目がある。だが、ある猛暑の日、耕地が牛の糞で臭い出すと、怒り狂った蛙たちが罎麻溜めに入り込んできた。彼等は今までに聞いたことのない下卑た声で鳴き喚いていた。それらは瓶の中でオタマジャクシがかえった蛙とは似ても似つかぬ連中だった。

辺り一面は低音のコーラスで一杯だった
 罎麻溜めの真下の泥土には
 大きな腹の蛙共が
 頭をふんぞりかえらし
 弛んだ首は帆のように鼓動していた
 何匹かが跳んだ
 ビチャビチャいう卑猥な音を聞いて
 僕は怯えた 何匹かは泥まみれの
 手留弾の様に坐り
 ぼてっとした頭で尻をこいていた
 僕は気分が悪くなり身を翻して走って逃げた
 大きな泥寧の王たちが復讐のために
 あそこに集まっていたのだ
 手でも潰けようものなら
 蛙の卵は僕のその手を掴んで
 離さないだろうと悟った

前半の長閑なナチュラルリストは本物の自然から手痛い仕返しを受ける。学校で観察していた蛙の卵や蛙たちが、いかに奇麗事の世界であったかを僕は思い知らされ、僕の中のナチュラルリストは死ぬ。ヒーニーの世界はここから始まる。美しく愛らしい自然が、実はその中に修羅を抱えていることを知るのは辛いことだが、そこを乗り越えねば少年は大人になれない。その通過儀礼の衝撃を綴ったのが、この第一詩集だといえる。平和な自然が不条理な現実を見せつけるその瞬間をヒーニーは正確にかつ冷静に観察する。このころ彼が強い影響を受けたのは今は桂冠詩人となっているテッド・ヒューズであった。ヒューズも自然を冷静に、正確に観察する詩人である。そして自然の生命の営みの中に潜む命の不思議さに引かれ、その不思議さを奇怪なイメージで表現しようとする詩人である。ヒーニーは其の観察眼と表現力に強い影響を受けた。動物たちの動きや表情の表現には其のことがはっきり現われている。だが決定的な相違は一方が対象としての命の表現に徹したのにたいし、他方はそこに自らの姿を見たこと、ではないだろうか。ヒューズの詩は彼の大人へのイニシエーションを描いているのではなかった。ヒーニーは自然の持つ不条理を其のまま受け入れることを学んでゆく。自然を美しく作り替えようとする

るのは、小賢しい人間の思い上がりだと彼は言っているようだ。かつてのスペンダーのように、われわれは破壊的要素の中に一度深く沈潜しなければならない。浮き上がる力は其のとき見つかるだろう。と彼は言っていると私は考える。

「あるナチュラルリストの死」は通過儀礼を終えた少年ヒーニーの姿を描いて完璧である。「黒イチゴ摘み」はそんな自然の不条理を現実として受け入れようとする少年ヒーニーの強靱な神経と悲しさを描いている。

八月も下旬 まる一週間もたつぷりと
 雨や太陽に浸れば黒イチゴは熟してくる
 最初 一粒だけ艶やかな紫色の粒ができるが
 他のものはまだ淡紅色で青く 結び目のように固い
 其の最初の実を食べると
 果肉はこくのある葡萄酒のように甘い
 そこには夏の血がある

自然の営みの美しさ、愛しさに包まれた少年がここにはいる。だがその自然の甘美さは直ぐに少年を裏切るのだ。

桶が一杯になる頃には毛が生え
 鼠色の菌が貯蔵庫に繁殖して
 果汁も鼻をつくようになる
 木から摘み取られた途端
 実は発酵し甘い果肉も酔っぱくなるのだ
 僕はいつも泣き出したくなる
 缶一杯に詰めた美しい実が
 腐った臭いになるなんて筋が通らない
 毎年 其のままであって欲しいと願いながら
 思い通りにならないのだ

「予防駆除」という作品はさらに残酷な自然の現実を見せつける。牧農家にとって小動物による病気の媒介が一番困ったことである。鼠はもとより、小猫や小犬も病気の伝染を防ぐためには予め駆除することも必要である。それによって人間、家畜、野性の生き物たちの生態系が保たれるのである。サバンナでの野性動物たちの共生は適度の殺し合いによって成り立っていることを知らねばならない。そこでは生白いヒューマニズムの愚かしさが露呈されるのである。

六歳のとき 初めて子猫たちの溺死を見た
 ダン・タガートがバケツの中に投げ入れたのだ
 「この痩せたチビ糞め」か弱い金属音がした

．．． ．．．
 急にぞっとして僕は数日間悲しくなって
 裏庭をうろつき濡れた三つの死体が
 古びた夏の糞のように乾燥するのを見ていた

．．． ．．．
 「残酷防止」は 死を不自然と考える町中では
 白々しく通用するが 農場をうまく経営してゆくには
 厄病神は駆除されなければならないのだ

不条理は人間の歴史には付き物なのだ。「じゃがいも掘りに行って」は歴史の不条理のなかで生きてきたアイルランドの人々の苦しみじゃがいもの姿のなかに結晶する。自然の中の不条理はやがて歴史の中の不条理へと移ってゆく。アイルランドという、言わば不条理其のものの中で生きるヒーニーが歴史という尤もらしい形を取って現われる人間の勝手な政治に厳しい目を向けるのは当然の成り行きであろう。そこにはイギリスの植民地として収奪されるアイルランド農民の姿が冷徹な観察眼で描写される。

盲目の生きたドクロが
 とてつもなくがたがたの骸骨の上ののっかって
 一八四五年の大地を駆け巡り
 疫病にかかった根を貪り食って死んだ

自然の裏切り、人間の冷酷さ、とともに地霊との交流の不思議もヒーニーにとっては大きな要素である。「水占い師」はそういった土地の奥にある力の存在と、それと交信する能力との不思議に目を向けた作品である。

緑の生け垣から切り取られた
 二股のハシバミの枝
 水占い師はその小枝のV字形の両枝を
 しっかり握り
 地面に輪を描きながら神経を集中し
 専門家らしく騒ぎもせず
 水脈の引きを探した

突然 引きが刺されたように鋭く来た
 杖が震えながら正確にそこを指す
 地下の水が緑のアンテナを通じて
 其の秘密の発信局を伝えてくるのだ

詩人とはこの水占い師のようなものとヒーニーは言う。自然と繋がるということはこのようなことなのだ。ナチュラルリストではこうはいかない。詩人と自然との間には不思議な力ができる。詩はそこから生まれてこなければならないのだ。其のように宗教も大袈裟な形式のなかにあるのではなく、町の教会の片隅に膝まづく貧しい女たちの姿のなかにこそあることを「町の教会の貧しい女たち」は描き出してくれる。

巻頭詩「土を掘る」にはじゃがいもに対する想い入れが、父親から祖父を通して伝わってきたヒーニー家の農家としての伝統が、アイルランドの歴史と重なり合って歌い込められている。同時にそれは歴史の流れから外れた自分の姿と対立するものとなる。

人さし指と親指との間に
ずんぐりしたペンがある
銃のように馴染んでいる

窓のしたでカリカリと良く響く音がする
鋤が小石混じりの土に食い込んでいるのだ
親父が土を掘っている 見下ろしていると

花壇の中で尻に力がこもり
ぐいと下がっては上がってくる
それはじゃがいも畑で親父が
土を掘るときのリズム
上体を屈めた二十年前の姿だ

父は今も昔も同じ姿で土を掘り、じゃがいもを掘り出している。じゃがいもを掘る鋤は父の手にすっかり馴染んでいる。ところが息子は畑に出ることもなく、鋤を握る代わりに指にはペンが馴染み、しかもそこには、鋤を握る手には馴染まぬ血で血を洗う同じ民族同志の争いが重なっている。息子は二階の書斎で詩を書き、父は下の畑でじゃがいもを掘っている。父と息子の隔たりは大きい。

じゃがいも畑の表土の冷たい匂い
湿った泥炭土のぐにゃぐにゃで
しかもびしゃっとした感触
生きている根っこを
そっけなく切った鋤の刃の
切り口が僕の頭に蘇る
だが僕の手にはこうした人の後を嗣ぐ

鋤はない

人さし指と親指の間には
 ずんぐりしてペンがある
 僕はこれで掘るのだ

「僕はこれで掘るのだ」と自分に言い聞かせてはいるが、まだこの第一詩集では何をどう掘ってよいのか判らない。それどころか、「だが僕の手にはこうした人の後を継ぐ鋤はない」という立場の無さ、断絶感、が重苦しくのしかかっている。

立場の喪失と少年から大人への通過儀礼とを中心に第一詩集を考えて見たが、ここにはそれ以上に多くのことが込められている。其のことは第二詩集以下を読みながら考えることにしよう。

(3) 『闇への入り口』

第二詩集『闇への入り口』は1969年に発刊された。第一詩集『ナチュラリストの死』で常識的な世界観に決別したヒーニーは、常識的、合理的世界観に替わるものとして地霊 *genius loci* との繋がりを求めたのであった。「掘る」という行為は彼にとって何か不動のものとの繋がりを求める行為なのである。同時にそれは掘ることによって生きてきた父、祖父へと遡る家の血脈に繋がろうとする願いでもあった。*displacement* の詩人としてのヒーニーにとって掘ることは必然的な営みであったと言えよう。

第二詩集の表題についてヒーニー自身の説明によれば、「詩というものは隠された情念の世界への入り口、或いは、出口」であり、「言葉はそれ自体ドアなのだ」と言っている。たしかに詩は名付け得ない状況——フロイト風に言えば——ファンタズム、あるいはT. S. エリオット風に言えば——暗黒の胎児、に向かう入り口であり、それを引き出してくる出口でもある。この詩集は彼の詩論集といっても良い。ヒーニーの心に蟠るものは、勿論個人的なファンタズムでもあるが、それは同時にアイルランドの抱えるファンタズムでもある。厳しい政治的状況が個人的ファンタズムとなって表象されるところにヒーニーの詩の魅力があるとも言えるだろう。

第一詩集がいわば彼の旅立ちの宣言であるとすれば、これは求めるものを探す自己発見の書である。

掘ることによって確かに生きるための糧である薯を掘り出すことが出来たし、それ程確実な生きることの証はなかった。だが、その営みに、当然のように従うことから決別したヒーニーにとって、「僕はこれ（ペン）で掘るのだ」と宣言してみても、彼が掘り出すものは薯のよう

に大地にどっしりと根付いた固いものではない。水占い師が探り当てる地下水も流れる水ではなく地下に淀んだ溜り水であった。動かぬものではなく、何か新しい、動きだすものを彼は求めていた。第一詩集は「掘る」という動作は描かれているが、不思議に静かな、動かぬ感じを漂はせていた。どこかへ行かねばならない、という想いが第二詩集には漲っている。彼の関心が大地のなかの薯から水に変わるのは象徴的である。

「鮭釣り師から鮭へ」

突き出した口を上流に向け
おまえは再び殻竿を打つように内陸に向かう
海での流浪の旅は故郷の川の引力に引かれて
無条件に取りやめとなった

僕は川の真ん中に立って釣り糸を投げる
足元でひしめき合う川の水は腰に下げた魚鉤や網
斑ら色の美しい毛針を飛ばす
白い手首を映している

．．．

おまえが殺るとき 僕も殺る
僕らは毛針をはさんで共に無の境地
鋼の針がつかえた喉を お前はどうか仕様もない
僕は魚の臭いをさせ鱗だらけで家路に向かう

水の中から鮭を釣ることは、畠からジャガ芋を掘ることに似ているが、ジャガ芋は先祖の耕した土地から、自分の手で丹精して育てあげたもの、鮭は全く自分に属さない独立した存在。ジャガ芋と自分との間には深い絆があるが、鮭と自分との間には戦いしかない。ヘミングウェイの『老人と海』で描かれるサンチャゴ爺さんとカジキマグロの愛のこもった一騎打ちを思い出させるようである。鋼の針を如何にして鮭の喉に引っ掛けるか、それは肉体的な戦いではなく、極めてソフィスティケートされた静かな戦いである。それは一見閑かな風景に見えるが、命を懸けた真剣な戦いなのだ。流れる水の中から、自分の物ではない他人の命を釣り上げること、ヒーニーはそこに自分の進む道を見出したのではなかろうか。

「いなくなった」

光るくつわの両端で
 泡立っていた緑のあぶくは
 蜘蛛の巣のような草の滓
 捻れた腹帯は汗で堅くなり
 手に冷たい目隠し革の当てものが
 膨らんで表地からはみでている
 手綱や金輪や引き革は
 垂れ下ったままだ

彼奴のむんむんした臭いはなくなった
 ここには彼奴の臭いが黴のように残っている
 彼奴は蹄だけをつけて
 急いでいってしまった
 この馬小屋を散らかしたまま

“GONE”という英語の表題は文字通り「行ってしまった」という意味ではあるが、それ以外に「逝ってしまった」という意味でもある。馬は売られたのかもしれないし、死んでしまったのかもしれない。何れにしても掌中の玉は無くなったのである。残ったものは、実感というか、存在感のしっかりした馬ではなく、黴のような臭いだけなのだ。

「夢」

手作りだから頭部が
 ずっしりと重い鉈鎌で
 電信棒ほどの太い木の幹を
 僕はぶった切っていた
 両袖をまくり上げていたので
 刃先を振るって打ち込むとき
 大気がひんやりと両の腕を煽った
 それから刃を引き抜こうと躍起になった

もう一度振り下ろすと
 男の頭が鉈の下に現われた

僕は鉈の刃がそ奴の額の骨に
 食い込んで止まる音を聞いたとたん
 目が覚めた

僕がぶった切っている太い木の幹は連綿と先祖から続いている命の木、あるいは Family tree、であろう。気が付くと僕が振り下ろした鉈の刃は男の額に食い込んでいたのである。男は父であり、祖父であるかもしれない。水占い師が榛の枝で地面を探り、止まったところには水脈があるのと同じように、切ろうとした太い木の幹の中には先祖の男たちがいる。「いなくなった」では生き生きと大地を駆けるはずの駿馬が、大地を駆け抜ける代わりに微の臭いとなって消えてしまった。「掘る」だけでは駄目なので、どこかへ行かねばならないのに、何処へも行きようのない閉塞感のみが残る世界である。

第一詩集の最後で

子供の頃 周りの者は僕を釣瓶や巻き上げ機のある
 井戸や古いポンプのそばから遠ざけることは出来なかった
 僕は暗い穴 閉じこめられた空
 水草や微や湿った苔の臭いが好きだった

と歌い

今どこかの井戸を覗き込んで浮草を調べたり泥を触ったり
 大きな目のナルキソスを見つめたりすることは
 全く大人げない 僕が詩を作るのは
 自分を見るため 闇を木霊させるため

と歌ったのを受けて生まれた第二詩集『闇への入り口』ではあるが見つめる自分のなかの闇は木霊してくれそうにない。それでも「僕」は迸り出る開放を求めて自分を見つめ続けねばならないのだ。彼はポンプが好きだ。詩人はポンプのようなものだと思える。地下に潜む水を、まるで掘り出すように、ポンプで汲み上げると、眠っていた水が生き生きと迸る。溜まっていた地下の水が筒先から迸る快感を求めて彼は闇への入り口を探る。「鍛冶屋」という詩では「僕にわかっているのは闇への入り口だけ」と嘆きながらも、その入り口の奥では鍛冶屋が早いピッチで鉄床を打っている音を聞いている。其処では火花が飛び散り、真っ赤に焼けた蹄鉄を水に入れると湯玉がじゅっと弾ける。その激しい営みのなかから何かが生まれるという予感

が詩人を駆り立てるのだ。

「春の祭典」

こうして冬は拳を握り締め
その拳をポンプのなかにぐっと押し込んでいた
ピストンは凍って

喉元に氷の固まりを詰め
鉄の肌には氷が凍てつき
ポンプの手は斜めになって麻痺していた

そこでぼく達は麦藁をよって
荒縄を作り ポンプの胴と
筒先にしっかり巻き付けた

火をつけるとポンプは炎に包まれ
それが冷えると僕らは水の堰を外した
彼女の入り口は濡れ そして彼女は進った

やがてこの水は神話の水の精ウンディーヌとなり、

「ウンディーヌ」

掘割りが川の近くで交わる辺りでは
私は小波を立て泡立っていた
やがてあの人私の腰に鍬を一と掘り深く食い込ませ

私を自分のものにした 私は彼の生命の溝を
喜んで飲み込み その根元まで深く彼の愛を求めて
我が身を炸裂させ 艶やかな穂に巻き付いた

こうして人間と交われれば生命を得るといわれたウンディーヌは、人間の彼=僕と交わって目的を達成する。ヒーニーは明らかにウンディーヌになることを求めていた。それは新しい生命を得ることなのである。ウンディーヌは人間と交わることを求め、ヒーニーは地霊と交わるこ

とを求めていた。「ウンディーヌ」はヒーニーの願いを鏡文字で表したものだといえよう。

「母」と題された作品も水に繋がっている。ポンプから出る水の音はヒーニーに取りついて
いる何か根源的なものかもしれない。この詩では出産のイメージとダブルさせて母を歌っている。

私がポンプを動かしていると
今汲み出しているロープのような水を
雨粒を含んだ風がほぐしている
ピストンがゴボゴボ動くたびに
空気の後産のように水は出る

・・・

横になっても立っていてもこの暴れん坊は抑えられない
私の井戸のなかのこのガボガボいう音

・・・

ああ この私の体が自分の生命の出口になるとき
太腿にスカートを巻き付け
喉に空気を詰め込むあの風に
私の水を解いてもらいたい

ゴボゴボと音を立ててポンプの口から迸る水は、「春の祭典」を思い出させる。まさに暗
やみの胎児の出現である。水は鮭を育て、その命を抱えてゴボゴボと迸り出る。水の不思議
な力はそれだけではない。

「思い出の遺物」

湖の水で
木は石化し
古いオールやマストは
長い年月の果てに
木目を硬化して
瑞々しさと季節の霊を

幽閉する

．．． ．．．

冷える星

石炭 金剛石

あるいは 燃えつきた流星の

突然の誕生は

余りにも単純で

この遺物が貯えているほどの

魅惑を持たない

学校の棚にある

オートミール色をした

石の破片

木の切れ端が長い間沼の水に浸っていて石となったのは、明らかに水の不思議な作用による。石化した木切れは鮭のように、ウンディーヌのように、命を秘めている。詩人の務めは水のよように木片にも命を与えることではないか。木片を石化して歴史と命を封じこめるには詩人自身のなかに沼の持つ力がなければならない。その力は詩人のなかに潜むファンタズム或いは暗黒の胎児が吐き出す気の力であろう。この詩につづいて「ネエ湖連詩——漁夫達に捧ぐ」が並ぶ。其処では湖と鰻とサルガッソーの海が主題になる。

1

湖は年毎に生け贄を要求する

湖は木を固めて石にする力を持っている

水底には沈んだ町がある

マン島の残した傷跡だ

．．． ．．．

2

内陸二百マイルの所では

内分泌腺が泥を掻き立てている

水の鱗が水に乗って

河口へと進んで行く
 こ奴は漂い流れて
 大西洋を半ばよぎる

.....

鰻の稚魚は水の精であり、水底の町の住人の怨霊でもある。人は水の精と伝説の恨みに対し生け贄を捧げ続けながら鰻を釣る。それは博物学者には理解できない正当な代価なのだ。此処には霊と人間とのみごとな共生がある。そこには全てが所を得た生きざまがあり、displacementの悲哀の入る余地はない。水占い師は地底の水と交感することで displacement の寂寥から逃れているようであった。だが鰻釣りの漁師には鰻との共感はない。どれだけの時が流れても鰻は「恐怖の太綱」であり続ける。

数年後夜川原に立っていると
 恐怖が孵化したかのように
 鰻が水草の中を通りぬけ

水草の原が流れてジェリー状の道になる時
 此処に立って
 鰻が地面を横断するのを見ていると
 僕の世界の生きた腰紐が解けて行くようだった

サルガッソーの海を回り、どうして故郷の川を見付けるのか判らないが、鰻は確実に戻ってくる。そして今、水草の原にジェリー状の道となって戻ってきた鰻は「泥濘の王」となって僕を威嚇した蛙のように、

筋ばったぬるぬるの鱗光が
 足元に続いていた

のである。「夕暮に大きな太陽を薄切りにして行く大草原は／此処にはない——／」と歌われるアイルランドの沼地は「数百万年をかけても／最後の段階に達していない」のである。

「沼地」

.....

この国の開拓者たちは

内へ下へと掘り続ける

掘りだされたそれぞれの地層には

人が住んでいた跡がある

沼の水はひょっとすると大西洋の滲み水

沼の真ん中は底無し

そこが鯉の故郷だとすれば、ヒーニー氏の帰る場所もそこ以外にはないのかもしれない。そこは永遠の displacement。

(続く)

Text: Seamus Heaney:

Poems

Death of A Naturalist (Faber & Faber, London, 1969)

Door into the Dark (Faber & Faber, 1969)

『シェイマス・ヒーニー全詩集 1966-1991』薬師川他訳注釈 (国文社、東京、1995)

Prose

Preoccupations, Selected Prose 1968-1978, (F & F, 1980)

The Government of the Tongue, The 1986 T. S. Eliot

Memorial Lectures and Other Critical Writings (F & F, 1988)

Some of References:

Maire and Conor O'brien: *A Concise History of IRELAND*

(Thames and Hudson, London, 1972, 1985 Third & Revised Edition)

R. F. Foster (ed.): *The Oxford Illustrated History of IRELAND*

(Oxford U.P. Oxford, 1991)

小野 修: 『アイルランド紛争』(明石書店、東京、1991)

Nicholas McGuinn: *Seamus Heaney* (E. J. Arnold, Leeds, 1986)

Elmer Andrews(ed.): *Seamus Heaney* (Macmillan, London, 1992)

Michael Parker: *Seamus Heaney* (Macmillan, London, 1993)

Thomas C. Foster: *Seamus Heaney* (The O'Brien, Dublin, 1989)

Tony Curtis(ed.): *The Art of Seamus Heaney* (Poetry Wales Press, Mid Glamorgan, 1982)

Robert F. Garratt(ed.): *Critical Essays on Seamus Heaney* (G.K.Hall & Co., New York, 1995)

風呂本 武敏: 『アングロ・アイリッシュの文学』(山口書店、京都、1992)